



渡辺 大直

但馬牛博物館のリニューアルオープンに合わせて、4月21日から5月6日まで、『牛と人の暮らし』大山錦子さんが描く『世界』と題して絵画展を開催した。

大山錦子さんは岐阜県在住の画家で、牛を題材にした絵を描き続けられている。また『安福』という名の但馬牛が、岐阜県の種雄牛として活躍し、飛騨牛の名を高めたこともあってか、大山さんは但馬牛にとりわけ親しみを持っていただいている。そんなこともあり、今回の企画が実現した。

馬と牛を御す道具にもその違いがある。馬は「ハミ」あるいは「クツワ」という棒状の金属を口にかませ、これにつないだ手綱で口角に刺激を送って、人の意志を伝える。この操作は馬に乗った状態で行えるので、「ハミ」の発明によって馬が乗用の家畜となつたとも言われる。

一方牛は、「鼻環」という鼻に通した環につないだ追いの綱で、左右の鼻の穴を隔てる

ついている。

その中で「牛に乗る花嫁さん」と題する、牛に乗った花嫁が棚田の道を行く絵に目が留まった。というのも、馬には乗るが、牛には乗らないものだと思っていたからだ。一緒に見ていた畜産組合長も、

「牛に乗ったらバチが当たるっていつて、牛には乗らんのだ」と言った。

鼻中隔に刺激を送って意志を伝える。通常この操作は牛の後方から行い、牛に乗って行えるものではない。

さらに蛇足ながら、乗ることを意味する「騎」という漢字には「馬」、引く張ること



牛に乗る花嫁を描いた大山さんの絵

ないものだと思つて自信はない。

そこで大山さんに、牛に花嫁を乗せる習慣がある地方があるのか尋ねてみた。すると大山さんは、「牛に人を乗せるのはとても珍しいが、仙北地方の民俗歴史資料館で、牛に乗った花嫁の写真を見てこの絵を描いた」と仰った。

乗用の家畜である馬ですら、人を乗せるまでには熟練した調教が必要だ。ましてや人を乗せたことがない牛に花嫁を乗せるとなると、とても大変だったのではないかと想像する。

禅画「騎牛帰家」は、心の平安が得られれば、牛飼いと牛は一体となり、牛を御する必要がなくなるといふ教えだ。この牛は人の暮らしの中に溶け込み、家族同様だったからこそ花嫁を乗せることができたんだろうか？などと思いながら、改めて「牛に乗る花嫁さん」を見た。

暮らしに溶け込む牛

■筆者プロフィール■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。